

《活動報告》

遺族会の実践記録 —ちいさな風の会の30年

若林 一美

記録をまとめるにあたり

本活動については、会発足当初から JICE の勉強会や講演会、紀要などを通して、助言などをいただいていた。30周年の時には、JICE 主催の公開講演会（「現代の死をめぐる諸相—ちいさな風の会の30年」、2018年12月1日）を通して、広く一般の方にも活動を知っていただくきっかけともなった。その後、長く続くコロナの影響もあり、この時の講演会が、公的な場での広く一般の方も含めた活動報告をする最後の機会ともなった。

政治や特定の宗教に限定しないという活動のなかで、JICE の研究員の方たちとは水俣、沖縄への旅を共有している。また「遺族の目を通して読む聖書」といった勉強会は立教大学と山梨英和大学で交互に開き、その折にも、研究員や大学院生との貴重な交わりの機会を持ってきた。このような経緯を踏まえ、本紀要に、活動の記録を報告する。

I ちいさな風の会 概要

1. 発足と会員構成

「ちいさな風の会」は、子どもを亡くした親の会で、1988年8月に設立され、現在も活動を継続している。

会発足の契機となったのは、毎日新聞の連載記事であった

(筆者：若林一美 タイトル：『あー、風』 連載期間：1988年1月8日～7月1日 全24回)

連載記事の内容は、死の周辺の出来事をおもにまとめたものだったが、連載中から終了後に編集部が届いた感想の多くは、子どもを亡くした親たちからだった。こういった読者からの感想をもとに、「子どもを亡くした親の会」準備会を呼びかけたのが、連載終了直後の8月2日付けの手紙で、8月19日（金）午後1時、四谷駅前にあった主婦会館での1回目の集まりを知らせている。

この時集まったのは、16名。関東以外にも、兵庫から朝8時の新幹線で参加した父親、入院中の家族に気をかけながら参加という母親、夫婦での出席もあった。

この時の様子は、問い合わせ者も含む全員に8月23日付けの手紙で、報告をした。

準備会に出席した人たちの意見を集約したものであり、確認されたのは、以下のことであった。

- 子ども亡くした親の集まりを作り、続けてほしい。
- 定期的に集まる機会を持つ。
- 少ない人数で、日本各地に点在しているので、会員相互の交流を「手記集」のようなものでつないでいく。
- 名簿作成
- 会の名称を決める
- 会費制とする

その後、当面は、記事執筆をしたことと、集まりの呼びかけをした若林が事務局を担当する、ということに決まった。

会の名称は、毎日新聞の連載タイトルが、『あー、風』であったことから、「ちいさな風の会」となる。

以来30年以上になるが、この準備会での約束事が、現在に至る会の活

動の要となっている。

この間、非体験者である若林が代表となることについても、何度かの話し合いも重ねられたが、世話人代表として会に関わることになった。

名簿については、検討を重ねたが、現在に至るまで発行をしていない。規則のようなものはないが、以下の点を重視している。

集まりは、体験者のみのクローズの中で行われ、その内容についてはメモを取らないこと、出席した当事者のなかでのみ共有することが原則で、会員同士でも安易に他人のことを話さないということを、毎回集まりの度に確認し、会をはじめている。

2. 活動内容

(1) 集会（定例会 地方集会）

発会当初は、東京と大阪の二か所で交互に開催していた。その後、東京での定例会を隔月で開き、その他の地域での集会や分科会（後述）を開くようになった。開催地は、函館、札幌、仙台、松本、長野、名古屋、甲府、京都、大阪、神戸、広島、愛媛、鹿児島、沖縄等。

地方集会については、会員が在住し、集会開催の準備などをしてくれる所となっている。時として、集会前に、「ちいさな風の会」の紹介を兼ねた講演会を開くこともあった。

(2) 分科会（参加は対象者に限定し、事前の申し込みが前提となる）

- ① 自死で子を亡くした親…suicide
- ② 幼い子どもを亡くした親… empty arms
- ③ 一人子などを亡くし、子どものいない親… only child
- ④ 兄弟姉妹の死（会員の子どもたち）…sibling
- ⑤ 被害者と加害者責任について
- ⑥ ターミナルケアについて考える
- ⑦ 遺された家族との関わりについて（夫婦、子ども）

などで、定例会とは別に開催しているが、分科会のなかで要望も高く、

参加者が多いのは「自死の分科会」で、東京や地方での集会とは別途に各地で開いている。この分科会は山梨で宿泊での集会も5回ほど開いているが、この時は、20人ほどの親たちが関東近辺の他、沖縄、九州、四国、関西、東北などからも集っている。

(3) 手記集の発行

「ちいさな風の会」の活動のなかでは、「集会」と手記集が両輪ともいえるものだ。

文集『あー、風』は会員をつなぐ大きな要となっている。自由に思いのままを綴る手記集で、同じ体験を経た人の思いを身近に感じられる存在となっている。

発行からしばらくは、投稿者氏名に加え、居住の都道府県までも入っていた。

会員人数も少なく、日本各地に点在するため、文集が会員相互の情報を知りえる場であり、名簿は作成しなかったが、文集をきっかけにした文通などの交流が始まったりしていた。

会員相互の交流のきっかけともなる居住地表記は大切な要素ではあったが、社会状況の変化などもあり、個人情報扱いという点から中止している。また自死遺族の方たちが増え、その方たちの多くは、他の家族などへの気遣いから匿名原稿として投稿されている。会員の中には、本名ではなく、匿名であることや居住地表記が消えたことで物足らなく思う人がいるのも事実だ。

この他、『Beyond Sorrow-Reflections on death and grief』という冊子も節目の時に発行し、全4冊となっている。ここには、会の活動の理解者として支えてくれている非体験者の方の声も寄せていただいている。

投稿者には、Robert Fulton、早川一光、石牟礼道子、高史明、徳永進、山形孝夫、緒方正人、渡辺総一といった活動を通してであった方々や、新聞連載などきっかけ作りの場を提供してくれたマスメディア関係者や、逸見敏郎前所長なども原稿を寄せてくださった。

手記集は、体験者のみの世界であるが、こちらの冊子は体験という意味では異なる人たちも含まれている。もちろん当事者の思いは、その人にしかわからないものではあるが、この冊子は、ひとつの風穴のような存在でもあるように思っている。体験者の声によって傷つくこともあるように、必ずしも共感とは、体験のみによって生まれるものではないことを感じあう場になっている。

日常生活の中で、無理解や誤解で傷つき、自分の感情を表すことのために強い遺族にとって、殻にこもるだけではなく、心を許せる「他者」の存在を感じることは、わずかながら救いにも通じるのではないかと思う。

会の発行物は、文集、冊子と合わせて、50冊となっている。

Ⅱ ちいさな風の会の歩み

1. 現状

発足当時から、定例会については、出欠は取らず、遅刻、早退も自由という集まりを続けてきた。

コロナ以降、会場が閉鎖され、急に中止になったり、制限人数が設けられることがあったりで、事前の往復はがきによる申し込みをお願いするようになった。

当初、事前の出欠を取らなかったのは、遺族たちにとって、とくに死別からまもない親たちにとって、決められた時間と場所に出向くという義務のようなものが派生すること自体が大きな負担であるという意見が多かったことによる。申し込みをされていて、急に欠席したからと言って負担に感じることはないのだが、そういう不必要な不安を感じることはない、ということでその日、その時にならないとどのくらいの人が集まるかわからないという前提で、集まりを続けてきた。

そのため、せっかく会場に出向いても、だれもいないということもあり得る。そこで、体験者ではないが、若林は、予定された時間と場所には必ず出席するということを約束し、以来これまでのすべての集まりに参加す

ることになった。最低「ふたりきり」の集まりになる可能性の了解のもとでのスタートあった。

実際、東京や大阪での集まりの折に、2人だけのこともあり、ひとつの集會に50人以上が集まることも少なくなかった。そのような大人数の時には、小グループに分かれることもあったが、参加者の要望は、同じ体験を持つ人の存在を顔や声で実感したいと、基本的には、中心は空洞になった大きなドーナツ型の円になって話をしていくことが多かった。

2. 課題

発足以来、会員同士の対面での集まりを続け、存在を肌で感じあうことそのものに大きな意義を見出していたのであるが、コロナ以降、様々な事情で、対面での集會を続けることが困難になってきた。会議室の収容人数が少なく設定されていることもあったが、会合の時にも一定の距離を保つことや、部屋のドアを開け放しておくことなど、小さな変化ではあるが、個人の精神的な意味での居場所、安心感を確保することが難しくなってきた。

同時に、会員の高齢化が進み、高齢者住宅などに入居していることから、個人の外出も制約されることなども出てきた。

連絡事項などについては、携帯などのメールで連絡をすることが可能な会員もいるが、それも少数であり、従来の対面式の集會のようないわゆるアナログの触れ合いの機会の維持、継続に支障をきたしている。

そのため、2020年から会そのものは休会として、今後の会のあり方について検討をすることとした。新体制をどのようにするのか、ということについて、会員全員へのアンケートを実施し、それをもとにして検討会を重ねているところである。

現時点で確認されていること。

1. 新体制は、新代表のもとで組織運営される。具体的には、まだ決まっていない。

2. Reunion（同窓会組織のようなもの）を組織化し、現会員以外にも、現在は会を離れている人も含めて希望者に呼びかけ、交流の機会を続ける。
3. 記録誌の作成－「わが子との死別」という個人的な体験の意味付けは、歳月の中で変容していく。こういった体験を持つ親が、「ちいさな風の会」を接点とした出会いを重ね、過ごした歳月の意味とは何か。悲しみそのものがどう変化してきたのか。個人史としてだけではなく、ひとつの遺族会の歩みとして記録するというもので、昨年から準備を進めている。

上記にあげた三点について、3年をかけて検討を続けてきたが、会の新しい運営体制については、決定されていない。一方、同窓会のような Reunion については、すでに呼びかけをし、準備会から会に参加し、現在は会を離れている人たちも含め、相談会を持つことができた。コロナ以降の集まりであったが、函館、滋賀、兵庫、広島、静岡などからも90歳を越える方が杖を突きながら、会の将来を案じて参加して下さったりしている。新規の活動として動き始めることが決定された。そのなかでも自分たちが、「ちいさな風の会」という遺族会で共有したものをのこし、確認したいという声も強く、記録集作成にむかって実質的に動き始めることになった。現在は会費も休止しているので、原資を寄付で呼びかけたところ、多くの方の賛同をえることができ、実際の作成の準備に入ったところである。

記録集の作成は、方向性を検討する会のなかでも話し合われたことであるが、発足から30年というひとつの節目を迎えた今、「ちいさな風の会」とは、なんであったのか、振り返りの意味と自分たちの足跡を残しておきたい、という意見が大きかった。新しく死別体験をした人に対しては、今後の体制にゆだねることになると思うが、少なくとも記録を残すことで、何等かの参考になるのではないかと考えている。

（ちいさな風の会 代表世話人・JICE 所員）